

『體源鈔』の参照書とその特徴

由井恭子

一 はじめに

三大楽書の一つである『體源鈔』は、豊原統秋によって編纂された楽書である。『教訓抄』『統教訓抄』に続いて編纂された楽書であるが、その構成は『教訓抄』などよりも雑駁な印象を受ける。あるテーマについて多数の書物を引用し事例を羅列する編纂方法をとっているのが特徴といえる。本稿では、豊原統秋がどのような書物を参照し『體源鈔』を編纂しているかを確認し、その特徴について考察する。

二 『體源鈔』概要

『體源鈔』は豊原統秋によって編纂された楽書である。狛近真による『教訓抄』、安倍季尚による『楽家祿』とともに、三大楽書として認識されている。豊原家は京都方楽所に属し、代々笙の演奏を担当していた。豊原統秋は、宝徳

二(一四五〇)年に豊原治秋の子息として誕生した¹⁾。没年は大永四(一五二四)年である。永正十五(一五一八)年雅楽頭に任ぜられ、後柏原天皇の笙の師範を務めた。応仁の乱など乱世の京を生きた楽人であった。『體源鈔』の編纂意図として、応仁の乱により混乱した世を嘆き、統秋の知る芸能伝承を書き残したとされる。『體源鈔』には、笙、横笛、簫などの管楽器、鞆鼓、太鼓などの打楽器、琵琶、和琴などの絃楽器のように、雅楽で演奏される楽器についての膨大な雑録が残されている。さらに、楽器についてだけでなく、調子を中心とした雅楽の原理、雅楽の演奏方法、神楽、催馬楽、風俗、今様、伽陀などの歌謡、舞楽、寺社における芸能と楽人の作法、日本だけではなく印度中国などから伝来した芸能伝承、室町將軍家の笙にまつわる記録、日蓮宗に対する篤い信仰心など、音楽を中心として多岐にわたる話題が取り上げられている。このような多岐にわたる内容は、多くの書物を参照し引用することにより示されている。次章では『體源鈔』に載る書物について確認していく。

三 『體源鈔』の参照書

『體源鈔』に示されている書名は多岐にわたる。三島暁子氏は、『體源鈔』の構成が複雑なことをあげ、その原因を以下のように指摘されている。³⁾

第一にその内容が多岐に及び、かつ、専門性が高い点である。譜や楽理の記述はもとより、和歌・香道・仏道に及び、その著述項目の脈絡は捉えにくく、また、記事の重複も多い。第二に、先行する楽書、『教訓抄』や『統教訓抄』のほか、多くの散逸文献からの引用が見られる点である。そしてそれらの記述は引用の旨が記されていても、その終始が明確な部分はむしろ少ないのである。

『體源鈔』には、「〇〇に曰く」のように典拠として示されている書名が数多く見られる。三島氏のご指摘どおり典拠

として示されているが、それが孫引きである可能性も高く、統秋が実際に何をどのように引用し『體源鈔』を編纂したのかを判断するのが難しい状況である。しかし、『體源鈔』に書名が残されている書物について考察することは、『體源鈔』の構成を考えるうえで必要と判断し、今回は書名として載るものを、表一にまとめた。書名は日本古典全書『體源鈔』の表記に従い示したが、異体字を通行字体にしたところもある。書名の後に（ ）で示したものは、筆者が簡単な注記などを付したものである。また、現在実態不明であるが書名と判断したものは、なるべく表に掲げた。書名かどうか判断できないものについては、表に掲げなかったものもある。

表一

日本の楽書／ 日本の譜	日本の文学作品
<p>相竹略頌 臨調子譜 足柄歌笛譜 東遊笛譜 打物案譜 打物案譜法 大神景範家記 大神景通家日記 大神景範家記 王監物頼吉譜 太田丸譜 尾張得業譜 音律図 懷竹抄 懷竹譜 衆談史 神楽催馬楽秘注(梁塵愚案抄) 神楽秘註(梁塵愚案抄) 神楽譜 量秋自筆記 伯光時舞譜 衆記 桂譜 管絃音義 教訓抄 宣陽殿竹譜 愚聞記 源家ノ舞ノ譜 荒序譜 五重(五重記) 伯朝葛記 伯光時自筆舞譜 催馬楽譜 左大臣信朝臣横笛譜貞保親王譜 三五要録 三五要録 二条宮譜 殘夜抄 催馬楽ノ笛譜 催馬楽譜 糸竹譜 十三帖譜(兼秋自筆撰十三帖譜) 十二律図 十一律旋宮図 笙譜 新撰龍吟抄 仁智譜(仁智要抄) 仁智要録新鳳秘録 資忠記(神楽作法 資忠記) 統教訓抄 體源鈔 龍秋自筆譜 龍秋書 龍秋図 知足院殿御譜 長竹譜 經信卿記朝葛記 南宮笛譜 内侍所御神楽略次第 八幡尼御前譜 博貞ガ譜風俗譜 豊兼抄 鳳凰集 鳳凰抄 堀川院御譜 每息譜 真葛記 政長朝臣家歌笛譜 万秋楽譜 光季秘記 光近目録 光時記 光時秘譜 光時譜 明竹譜 明暹譜 明德五年常楽会日記 綿譜 基政記 基政譜 夜鶴庭訓 幸秋譜梨園旧風 龍吟抄 類聚衆録 類聚衆譜 蓮道譜 六帖和琴系図</p>	<p>宇治殿御物語 興義抄 花鳥餘情 月清集(秋篠月清集) 源氏物語 江談抄 古今集(古今和歌集) 古今著聞集 故事記(古事記) 後撰(後撰和歌集) さ夜のねざめ 十訓抄 拾遺集(拾遺和歌集) 拾遺佳句 成尋阿闍梨方入唐之記 続草庵集 新撰髓腦 井蛙抄 千載佳句 千載集(千載和歌集) 徒然草 踏歌記 菟裘賦 内侍所御神楽略次第 日本書紀 風土記 弁内侍日記 方丈記 政秋撰集 枕草子 万葉集 無名抄 八雲御抄 大和物語 楊氏漢語抄 義貞記 梁塵秘抄 和名抄(和名類聚抄)</p>

日本の歴史的史料など	宇治左府の記 延喜御記 延喜式 寛治三年平等院一切経会記 きぬかつき 行基菩薩図 旧事本紀 十七條の憲法 中右記 内宴記 年代記 本朝格 本朝書籍目録 本朝令 匡房卿記(江記) 村上御記(村上天皇御記) 蒙求ノ注 麗氣記
中国の楽書／中国の譜	楽書 楽書要録 樂星図譜 樂府雜錄 琴操 虞世南琵琶賦 嵇叔夜琴賦 荊州記 阮瑀箜篌賦 古今樂錄 吳都賦 混天図 随調應律 薛収琵琶賦 大宋樂人魏奇録 大宋国魏歌譜 陳氏樂書 伝玄箏賦 伝玄琵琶賦 杜摯箏賦 馬融長笛賦 伏滔長笛賦 律書樂図
漢籍	易経 淮南子 王子年拾遺記 会要 樂緯 月令章句 家法詩 翰苑 漢旧義 韓子(韓非子) 韓詩外伝 顔氏家訓 漢書 関中記 漢武内伝 魏志 魏文帝与鍾大理書 鄴中記 玉篇 兼名苑 家語(孔子家語) 広雅 孝経 考工記(周礼考工記) 孔子三朝記 後周書 高祖実録 治聞記 後漢書 五経正義 五経通義 国語 五代史記 語林 蔡琰別伝 西京雜記 左伝(春秋左氏伝) 山谷(山谷詩集) 三蒼 三休詩(三体唐詩) 三礼義宗 三礼図 慈恩伝(大唐大慈恩寺三蔵法師伝) 爾雅 史記 事始 釈名 周易 周書 尚書(書経) 周礼 荀子 貞観政要 初学記 蔣飭切韻 事林広記 晋書 新唐書 尋明抄新論 醉郷日月 西征記 世本 世説(世説新語) 説文(説文解字) 千字文之注 蒼頡篇 宋史 莊子 続後漢書 丹陽記 注好選 調楽記 通礼義纂 通典 帝王世記 帝王代記 東観漢記 東京賦 唐書 唐令独断 道德経(老子道德経) 白氏文集 博物志 百詠(李嶠百詠) 白虎通 風俗通義 諷賦 編珠録 編年通論 穆天子伝 蒙求 毛詩 文選 文選注 遊仙窟 遊方問録 礼記 李氏五運図 呂氏春秋 列子 列子伝 列女伝 列仙伝 論語 論語疏 冤魂志
経典／仏教書類	阿含経 阿弥陀経 観心本尊抄 観音経 観仏相海経 弘決(摩訶止観輔行伝弘決) 華嚴経 玄義(法華玄義) 元亨釈書 金剛宝山ノ記(役行者ノ金剛宝山ノ記) 金光明経 最勝王経 止観(摩訶止観) 爾前ノ経(爾前経) 次第禪門 悉曇藏 持法華問答抄 釈氏 沙弥経 十往生経 浄名経(維摩経) 心経(般若心経) 山海経 提謂経(提謂波利経) 大集経(大方等大集経) 太子伝 大乘経 大日経 大般若経 大品般若経 大論(大智度論) 鄭注 天台御尺文句(法華文句) 仁王経 涅槃経 般若経 普賢経 付法蔵伝 仏出経 方等(方等経) 法華経 法華経尺文(法華経尺文) 法則集 菩薩処胎経 本尊供養御書 梵網経 摩訶止観 妙音天御誓願 妙法曼荼羅供養抄(妙法曼陀羅供養事) 妙楽大師御尺(法華玄義釈籤) 無行経 文句記(法華文句記) 薬師経 麗氣記

表一からも、『體源鈔』のなかには膨大な書物の情報が入っていることが明らかである。

まず、日本の楽書や譜について見ていきたい。日本の楽書や譜については、九十以上の書名が確認できる。このなかで、『體源鈔』に最も多く書名が載るのは『教訓抄』で、見落としもあるかもしれないが、七十箇所以上確認することができた。続いて書名が多く載るのは『続教訓抄』で、二十八箇所確認することができた。三島氏がすでに指摘されているが、『體源鈔』は先に成立した『教訓抄』『続教訓抄』を参照していると考えられる。それはこの引用箇所が多さからもうかがえる。これらは、『體源鈔』編纂の際に最も活用された書物といえる。

『體源鈔』に見られる、日本の楽書、譜については、すでに三島氏によって、守覚法親王の『糸竹要抄』、妙音院師長と藤原孝道、その子息の孝時が携わった『三五要録』『残夜抄』『三五中録』、雅楽の主旋律を演奏する笛譜として『宣陽殿竹譜』『貞保親王御撰南竹譜』『博雅卿撰長竹譜』『大神惟季懐中譜』などが参考にされていたこと、またたとえば豊原兼秋による『每息譜』などの、豊原家祖先の記録類、そして御神楽に関する記録が多いことが指摘されている。⁶⁾

そのほか、楽家の記録や伝来譜が多く見られる。たとえば、笛の家大神家の『大神景範家記』『大神景通家日記』『大神景範家記』『惟李相伝譜』『是季譜』『基政記』『基政譜』、南都狛家の『狛朝葛記』『狛光時自筆舞譜』『狛光近之自筆ノ舞譜』『光季秘記』『光近目録』『光時記』『光時秘譜』『光時譜』などである。このように楽家の記録や譜が多く見られるが、『體源鈔』に見られる箇所は、『教訓抄』『続教訓抄』からの孫引きも多い。今後詳細に分析していきたい。

また、『體源鈔』巻十には、神楽、催馬楽、風俗、今様、伽陀の項目があり、統秋が歌謡に注目していたことがうかがえる。『教訓抄』『続教訓抄』には引用されていないものとして、一条兼良の『神楽催馬楽秘注(梁塵愚案抄)』『神楽秘注(梁塵愚案抄)』が挙げられる。三島氏のご指摘にもあるとおり、豊原統秋が綾小路家から相伝した秘蔵の書であったが、『続教訓抄』成立以後に編纂された『梁塵愚案抄』も手に入れ、それらの知識を『體源鈔』に入れようとした意識がうかがえる。

つぎに日本の文学作品について確認したい。統秋自身は和歌をよくし、家集『松下抄』『豊原統秋千首』などが残っていることから、文学の素養も持ち合わせていたと考えられる。書名としては『古今和歌集』『拾遺和歌集』『後撰和歌集』『千載和歌集』などの勅撰集、『万葉集』、藤原良経の『秋篠月清集』、頼阿の『続草庵集』などの歌集、藤原清輔の『奥義抄』、藤原公任の『新撰髓脳』、鴨長明の『無明抄』、順徳天皇の『八雲御抄』などの歌学書も見られる。そして、『古事記』『日本書紀』『源氏物語』『枕草子』『古今著聞集』『十訓抄』『大和物語』『梁塵秘抄』など著名な作品も見られる。統秋は、『體源鈔』にたびたび『源氏物語』を引用しており、『源氏物語』を愛読していた可能性が高い。また、一条兼良による源氏物語の注釈『花鳥餘情』の書名も見られ、熱心に研究していた様子がうかがえる。

続いて、日本の歴史史料などを確認する。日記類として、醍醐天皇の『延喜御記』、村上天皇の『村上御記』、大江匡房の『匡房卿記』、藤原宗忠の『中右記』などが挙げられる。そのほか『寛治三年平等院一切経会記』のように、特定の儀礼の記録も見られる。この部分は『教訓抄』と同文のため、『教訓抄』からの孫引きと考えられるが、『體源鈔』では『教訓抄』からの引用とはせず、「寛治三年平等院一切経会記云」とし、その日の様子を示している。『體源鈔』の編纂方法の一端がうかがえる。

さらに、中国の楽書や譜について確認する。最も多く記載されているのは『律書楽図』で、見落としもあるかもしれないが十八箇所、書名を確認することができる。『律書楽図』は『教訓抄』『続教訓抄』にも多く引用されている中国の楽書である。現在散逸しており全貌を知ることができないが、『教訓抄』『続教訓抄』『體源鈔』に引かれていることにより、その内容の一端が確認できる。ここで、『教訓抄』『続教訓抄』『體源鈔』が挙げられている箇所についての項目を比較してみる。

『教訓抄』卷八横笛

秘事者、納序、古弾、待拍子、高麗調子、『犬』『吉簡』

抑長笛者、馬融善ノ吹者ナツク為「長笛」。有「文選馬季帳之長笛賦」。末代ニ此笛ヲ伝テ不_レ吹。可_レ尋。短笛八尺八云。律書樂図云、是以為「短笛」。

『統教訓抄』卷十一⁽¹²⁾

狛笛秘曲者

納序 古彈 待拍子 高麗調子 狛犬 吉簡

三笛会図

(図 省略)

第四太笛者

又名「長笛」

律書樂図云、馬融善吹ハ長笛トス。文選馬季長方笛賦ニ見エタリ。

『體源鈔』卷五

狛笛秘曲者

納序 古彈 待拍子 高麗調子 狛犬 吉簡

三笛会図

(図 省略)

太笛者 又名長笛

律書樂図ニ云ク、馬融善吹ハ長笛トス。文選馬季長方笛ノ賦ニ見ヘタリ。

これらは、笛について説明している場面の一部である。『教訓抄』では、笛の秘事が挙げられ、そもそも長笛は馬

融善が吹く者を長笛と名付けたとする。その後、『文選』に馬季帳の長笛賦があり、末代ではこの笛は伝来しているが吹かないと示し、それに対し、「可_レ尋」と覚え書きを残している。話題が短笛に移り、短笛は八尺といい、『律書楽図』にこれをもって短笛となすと、ここで『律書楽図』が示されている。それに対し、『統教訓抄』『體源鈔』では、『教訓抄』同様に秘事（秘曲）を挙げ、つぎに三笛会図を挙げている。その後『律書楽図』からの引用として、「馬融善吹ハ長笛トス」と載せている。このように『統教訓抄』は『教訓抄』の構成を参照しつつ、さらに情報を増補、改訂している。『體源鈔』は『統教訓抄』と配列も記述も同じため、この箇所は『體源鈔』が『統教訓抄』を参照し引用していると考えられる。しかし、『體源鈔』のこの場面には『統教訓抄』の書名は見られない。このように、『體源鈔』には引用元と考えられる書名を明記していない箇所が多くあると予測され、そのため統教が実際に引用した資料を特定できず、編纂方法を解明するのが困難となっている。

そのほか、『體源鈔』には、『大宋楽人魏奇録』『大宋国歌譜』など、現在では実態が不明な書籍名も残っている。『體源鈔』巻四に『大宋楽人魏奇録』の書名が残る。その場面を確認する。¹⁵⁾

乙丑七月甲申二十日壬子大宋楽人魏奇録

奥書

永享三年十一月晦日書之

改名治秋

豊原朝臣重秋判

このように引用の後に、豊原重秋の奥書を載せており、これが豊原家に伝来していた書物であることがうかがえる。ここから、豊原家は日本の楽書や譜だけではなく、中国の楽に関する書籍も所持していたことが予測される。

つぎに漢籍について確認する。表一に掲げたように、『體源鈔』には多くの漢籍が登場する。たとえば、巻四は笙について述べられているが、まず、『釈名』『礼記』『爾雅』『白虎通』などを引用しながら、笙の特徴や起源が述べられている。このように中国に伝わる楽器の起源や、音楽理論について漢籍から引用しながら説明しているが、これら

は『統教訓抄』にも同じ記述が見られ、¹⁶⁾『體源鈔』はこれらの漢籍を直接引用したとは考えづらい。

しかし、それが、孫引きであったとしても、約百種類の漢籍の書名が確認され、『體源鈔』のなかに構成されていることは注目される。たとえば、儒教書としては『孔子家語』『孝経』『五経正義』『春秋左氏伝』『礼記』『論語』など、歴史書の『漢書』『魏志』『国語』『史記』『周書』『晋書』『唐書』など、字書の『玉篇』『爾雅』『广雅』『釈名』『説文解字』、思想書の『淮南子』『韓非子』『荀子』『莊子』など、文学作品としては『韓詩外伝』『西京雜記』『三体唐詩』『注好選』『白氏文集』『文選』『遊仙窟』などが見られる。そのほかにも、易について記した『易経』、百科事典の『初学記』、歳時記の『事林広記』、世界の事物の雑記『博物志』など、さまざまなジャンルの書名が見られる。これらのなかには、『教訓抄』『統教訓抄』『體源鈔』と樂書に引かれ続けている書もある。今後、日本の樂書の構成を考察するうえでも、その引用方法を詳細に検討しなくてはならない。

最後に、經典・仏教書類を確認する。經典としては、『阿含経』『阿弥陀経』『観音経』『般若心経』『涅槃経』『普賢経』など、一般的によく知られているものが見られる。そして、周知のとおり豊原統秋は日蓮宗（法華宗）の熱烈な信者であるため、日蓮の著作である『観心本尊抄』『持法華問答抄』『本尊供養御書』『妙法曼荼羅供養抄』が挙げられているのが特徴である。さらに、日蓮宗で大切にされた『爾前経』や、『日蓮上人遺文』に引用が残る『観仏相海経』の書名も見られる。先に成立した『教訓抄』『統教訓抄』では、著者の信仰についての記述はあまり見られないが、『體源鈔』のなかで統秋は、自身の法華信仰について熱心に記しており、そのなかで日蓮関連の書籍が引用されているのである。統秋は、樂人として樂の知識を『體源鈔』に残しただけではなく、法華信者としての思想を日蓮の著作を引用しながら所々で熱心に述べている。このように仏教に造詣の深い統秋だからこそ、多くの經典や仏教書を使用しながら、自分の思想を述べる事ができたと考えられる。

四 むすび

本稿では、『體源鈔』がどのような情報を元に編成されているのかを知るため、『體源鈔』に記されている書名を確認した。書名は、日本の楽書・譜、日本の文学作品、日本の歴史的史料など、中国の楽書・譜、漢籍、經典・仏教書類に分類して示した。これらは、『教訓抄』『続教訓抄』からの孫引きも多いと考えられるが、『體源鈔』のなかには、これら多岐にわたる書物の情報が取り込まれていることを示す一つの目安といえるだろう。今後はさらに詳細に分析し、引用方法や配列について考察していきたい。

註

(1) 豊原統秋については、『大日本百科全書』『国史大辞典』などを参考にした。

<https://japanknowledge-com.ezproxy.taislib.jp/lib/display/?lid=1001000326496> <https://japanknowledge-com.ezproxy.taislib.jp/lib/display/?lid=30010zz352190> (二〇二〇年十一月二二日閲覧)

『體源鈔』の成立や引用書籍については、福原尚氏『體源鈔』所引の『十訓抄』について―受容の様相とその本文研究上の価値―、『国語国文』第五七卷第九号 一九八八年九月、中原香苗氏「楽書と偽書―『體源鈔』所引『至要抄』をめぐって―」、『偽書』の生成―中世的思考と表現』森話社 二〇〇三年十一月、中原香苗氏「『體源鈔』の生成」『古代中世文学研究論集』第三集 和泉書院 二〇〇一年、中原香苗氏『體源鈔』所引の『愚聞記』について』『日本文学』第六一卷第三号 二〇二二年三月、などを参考にした。

(2) 将軍家の笙の師範については、三島暁子氏『天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史』思文閣 二〇二二年、豊原統秋の法華信仰については、冠賢一氏「室町時代の京都楽家 豊原統秋の法華信仰」『渡邊寶陽先生古希記念論文集 日蓮教学教団史論叢』平楽寺書店 二〇〇三年三月、石附敏幸氏『體源鈔』にみる地下楽人豊原統秋の

法華信仰』『興風』二八号 二〇一六年十二月に詳しい。

- (3) 三島暁子氏 『天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史』第九章「豊原統秋と『體源鈔』研究の展望」 思文閣 二〇一二年 三〇〇頁
- (4) 『覆刻 日本古典全集』（體源鈔）一～四） 現代思潮社 一九七八年
- (5) 前掲(3) 三〇二～三〇四頁
- (6) 前掲(3) 三〇四～三〇五頁
- (7) 前掲(3) 三〇五頁
- (8) 『覆刻 日本古典全集』（體源鈔）三） 現代思潮社 一九七八年 一一八頁
- (9) 『覆刻 日本古典全集』（體源鈔）三） 現代思潮社 一九七八年 八四七頁
- (10) 『教訓抄』は『日本思想大系』二二三（『古代中世芸術論』） 岩波書店 一九七三年 九七頁、『體源鈔』は『復刻 日本古典全集』（體源鈔）三） 現代思潮社 一九七八年 一〇三三頁～一〇三四頁
- (11) 『日本思想大系』二二三（『古代中世芸術論』） 岩波書店 一九七三年 一五六頁
- (12) 『覆刻 日本古典全集』（統教訓鈔）下） 日本古典全集刊行会 一九七七年 四七二～四七四頁
- (13) 『覆刻 日本古典全集』（體源鈔）二） 現代思潮社 一九七八年 五六五～五六六頁
- (14) 前掲(13) 四九八頁
- (15) 前掲(13) 三八五～三八六頁
- (16) 『覆刻 日本古典全集』（統教訓鈔）下） 日本古典全集刊行会 一九七七年 四〇三～四〇四頁

付記

* 本稿は、JSPS 科研費 19k00140 の成果の一部です。

*本稿【表一】作成にあたり、武南高校非常勤講師・大駒晴江氏、大正大学非常勤講師・北林茉莉代氏、大正大学総合佛教学研究so研究生・上條駿氏、大正大学総合佛教学研究so研究員・平間尚子氏（五十音順）の協力を得た。